

「ポストトゥルース」時代の科学コミュニケーション

—米国における科学への理解確保に向けた社会への働きかけの方向性—

初版投稿：2017/09/12，最新版投稿：2017/10/18

執筆者：白川 展之（主任研究官）

科学の重要性を世界に訴える活動「March-for-Science」

事実よりも感情が世論形成に影響をもたらす風潮「ポストトゥルース（Post-truth）※」の中で、米国の科学関連団体や個人を含めたアカデミックコミュニティでは、科学の重要性を直接社会に訴える活動「March-for-Science」を始めました。この活動は、地球環境を考える「アースデー」に合わせて始まり、2017年4月22日に科学技術の重要性を広く公衆に訴えかけるデモ行進が世界各地で行われ、地球温暖化対策などへの見直し姿勢を見せる米国のトランプ政権に批判の声を上げるものとして日本でもニュースになりました。

反科学的な社会的風潮と科学コミュニティの対応

科学に対し無関心かつ無理解なトランプ政権への移行などをきっかけに科学者コミュニティの側から始まった「March-for-Science」ですが、個別の科学技術分野ごとにボトムアップの意思決定が一般的な米国で科学者・技術者によって草の根的に科学研究一般の重要性を訴える活動が呼びかけられるのは、米国の科学政策に詳しい識者や研究助成機関の人によると珍しいことだそうです。

こうした活動の中心となっている組織の全体像を簡単に説明するのは難しいですが、研究者のみならず科学政策に関するステークホルダーが草の根的に個人の立場で参加しているようです。また、全米科学振興協会（AAAS）をはじめ、大学協会など個人の範囲を超えた科学政策関係の深い団体が支持を表明しています。この活動の基礎となった組織・活動には、AAASの総編集長 CEO Rush Holt 氏が創始した Be a Force for Science をはじめ、運動組織を標ぼうする組織としては、米国における科学者・技術者の政策形成への参画を進めることを目的とする組織として ESEP（Engaging Scientists & Engineers in Policy (ESEP) Coalition）といった組織があります。

科学への市民参加と科学者・技術者の意識改革

科学研究に普段縁がない人々に理解と共感の輪を拡げようとするこうした取り組みは、社会からの理解があって研究が推進できるということへの科学者・技術者側からの科学への理解確保に向けた意識改革の動きともいえます。ここでは、等身大の問題意識を人々と共有する

こうえで自身の研究の面白さなどを等身大で伝えるストーリーテリングの重要性が意識されています。

加えて、注目すべきなのは、一過性のイベントにとどめることなくこうした活動を持続的にしていくにはどうすればよいかが意識され、さらに議論が続いていることです。こうした活動を通じて科学への理解確保に向けた社会への働きかけが進むと、科学への市民参加（public-engagement）を通じたオープンサイエンスを促進することにもつながり、新たな科学の発展をもたらすきっかけになるかもしれません。

- ポストトゥルス(Post-truth):客観的な事実が、感情や個人的な信念に訴えることよりも、世論の形成にあまり影響を与えない状況に関連していることを指す言葉。

出典: <https://en.oxforddictionaries.com/word-of-the-year/word-of-the-year-2016>